

七月のテーマ
喜働

働くと は罪悪か

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一・一九九九）のこゝとばを掲載します。



え・小島サエキチ

働 き過ぎは罪悪だ、などという
って仕事にいそしんでいる

人を軽蔑するかのような風潮が
はじめている。あぶない、あぶな
い。ごまかされてはいけない。働
きすぎの「すぎ」をうっかり見の
がして、「働くことは罪悪だ」とい
った見方におち入りかかっている
のではなからうか。こうなると「な
まけることはよいことだ」から「遊
ぶことこそ美德である」というよ
うになりかねまい。

働きとは人生にとってたいした
意味のないものであるとか、休ん
だり、遊んだりすることが本当で
あり、働くことは生きるために止
むをえないものであり、いやいや
ながら、あるいは苦しみながらす
る労働であるとか、そのように考
えるならば、これらはいへんな
まちがいだ。働きは純粹な意味で
は、むしろ楽しいものだ。うれし
く喜ばしいものなのである。
仕事を与えられず、働かずにじ
っとしていることほど苦しいもの
はない。病気になる、働けなくな
った時、そのことがよくわかる。

（ああ、うれしい、今日も働ける。
ああ、よかった、今日も働ける）
そして働いているときに、また楽
しい。これが本来であり、そして
純粹なのである。

この喜びの働きに濁りが入った
とき、労働となる。性にあわぬと
か、無理強いをさせられるとか、
他に心配ごとがあったり、不平不
満が重なっているとか、というよ
うに、いやいやながら、苦しみつ
つ働くのが労働である。本来の働
き、純粹な働きなども含めすべて
働きを労働と称しているのは、誤
りなのである。労働省などという
のも誤りで、むしろ喜働省なども
変更すべきであり、労働者などは
喜働者と変えなければならぬ。

働きに対して休みと称している
のも、じつはひとつの働きにほか
ならない。

家にあつて家事の助けをするな
り、日曜大工をするなりリクリエ
ーションその他にしてもしつかり
計画をたて、ちゃんと行動するな
り、精神的な糧をうるとか、勉強
するとか、そうした一種の働きを

するのでないと、かえって身体を
害し、そのときの働きたいとして
大きなマイナスとなる。

休みでも大いにはたらくのでな
いと、頭はボケ、身体はなまって
しまう。これは生理学の教えると
おりだ。頭もつかえばつかうほど
よくなる。大脳の新しい皮質は、
そのようにできている。

心臓外科の先覚者であるアメリ
カのドバーギー博士は、毎日の働
きが他人の役にたつていると思
うとき、心の平安が得られ、とくべ
つな休暇旅行を計画して日常生活
から脱出しようなどと悪あがきを
する必要は起こらない、といって
いる。博士自身の仕事がとても嬉
しく楽しいので、逃げ出したいな
どと考えたこともないそうだ。

私たちは博士ほどの境地まで行
きつけないとしても、仕事をたい
せつにして、精一杯うち込んで働
き、休みのときにも適当な活動を
して、この限りある人生を有意義
に過ごしたいものだ。それが最大
の幸福なのである。

（月刊『新世』一九七三年二月号より）